

シノドゥス。司祭の不足と独身制

聖体についての世界代表司教会議において、司祭の不足に関する懸念が表明された。聖体が教会を築くなら、ミサを挙げられない小教区はどうなるのか、ということである。シノドゥスの文書もカトリック信者の増加に対して司祭が不足していることを示している。1978年には司祭一人当たりの信者数は1797人であったが、2003年には2677人になっているのだ。

この深刻な問題を前にして、まずローマ典礼の教会が貫く司祭の独身制が議題に上る。司祭に独身を強制することを止めれば司祭不足は解消するのではないが、この制度が教会に多大の奉仕ができるはずの男性からその機会を奪っているのではないか、召命が少なくなっている事実は、教会法のこの要請が教会の発展の足かせになったことを意味しないか、と問うのである。

全体的なデータは、時に無視できない部分的差異を覆い隠す。例えば、教区司祭と修道司祭を区別してみると、ヨハネ・パウロ2世の教皇在位期間に司祭の数は3.7%減少した(1978年の42万人から2002年の40万5千人)。しかし、この減少は修道司祭が13.1%減ったことによる。修道士から独身制を取り上げようとは誰も思うまい。それに対して、教区司祭のほうは、その期間に1.8%増加している。

第二バチカン公会議後の召命の危機は1990年ころから回復に向っている。そのときから教区司祭の数は3.7%上昇した。これはヨハネ・パウロ2世が教会に与えた活気のおかげであることは間違いない。

また地方的な差異も考慮に入れなければならない。聖職者の数は、ヨーロッパでは19%、オセアニアでは13%減った。それに対し、アメリカでは微増(1%)、そしてアフリカ(73%)とアジア(65%)では激増している。これは、大雑把に言って、司祭召命が、独身制よりもその地方の信仰生活の活力に左右されるということを示していよう。おそらくこの理由のために1億2千7百万の信者をもつアジアが、2億7千万の信者をもつヨーロッパよりも多くの神学生を持っているのであろう。あるいは同じ国でも、ほとんど空っぽの神学校をもつ教区と、十分な召命に恵まれている教区が並存していることも、この理由によると言えよう。

もし独身制が召命不足の原因なら、独身制をとらないプロテスタントの諸教団にはこの問題がないはずである。しかしながら、ヨーロッパとアメリカでは、プロテスタントの主要な教団も牧師の不足に喘いでいる。2002年の統計によれば、合衆国では11200の教団の3分の1が恒常的に牧師が不足している。1980年に546人あった新牧師の任命は、2000年には367人に減った。ルター派福音教会では2102人の説教師の職が空席である。これと類似の牧師不足がバプテリスト派、長老派、メソヂスト派などの主要な教団に見られる。どの教団でも、35歳以下の牧師は少数派となっている(ACEPRENSA, 49/02)。

こう見てくるとカトリック教会の司祭不足は例外的な現象でも、他の宗派に比べてより深刻な状況でもない。ヨーロッパでも同じことが言える。つまり、英国国教会もプロテスタントの諸教団もカトリック教会よりも多くの召し出しを持っているわけではないのである。

司祭の不足が憂慮すべき重大事であることは異論の余地はない。しかし、司祭の独身制のみを議論の対象とするのは、より根本的な原因と対峙しようとせず、付け焼刃的な解決をさがすという逃げの姿勢と言えるかもしれない。真に勇氣ある態度は、召命が少ない地域の霊的な温度をいかに上げるかを議論することではなかろうか。(Ignacio Aréchaga)

(ACEPRENSA, 12-X-2005, 115/05)